

Title	定家の部立百首「春」の構成：「初学百首」を起点として
Author(s)	細川, 知佐子
Citation	語文. 2008, 91, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69113">https://hdl.handle.net/11094/69113</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 定家の部立百首「春」の構成

——「初学百首」を起点として——

細川知佐子

## はじめに

定家のはじめての百首歌「初学百首」は、部立形式で詠まれている。稿者はこの部立形式に着目し、「初学百首」四季部の部立内部の構成（以下、構成とする）を、同じく部立形式で詠まれた俊成の『久安百首』と比較検討した。その結果、定家が俊成を手本としつつも独自性を併せ持ち、部立形式であることに極めて自覚的な態度で「初学百首」を詠出したことを論じた。<sup>(注1)</sup>本稿では、「初学百首」四季部の構成と、定家がそれ以後に詠んだ部立百首の構成との関係を考えたい。

## 一 部立百首「春」と「秋」の歌数

百首すべてが現存する定家の部立百首は、自選家集『拾遺愚草』上巻に、「初学百首」「見浦百首」「皇后宮大輔百首」（以下、「大輔百首」とする）「閑居百首」「正治初度百首」「千五百番歌

合「建保院百首」と成立順に収められ、『拾遺愚草員外』には、「閑居百首」と「正治初度百首」の間に成立した「一字百首」が収載されている。したがって、構成を確認できる定家の部立百首は、「初学百首」を含め八種存在する。この内、定家の独詠は「初学百首」と「一字百首」<sup>(注2)</sup>である。

さて、これら定家の部立百首の四季部「春」「夏」「秋」「冬」それぞれの部立歌数をみると、次頁の【表一】になる。【表二】には、「初学百首」以前に成立した百首歌の部立歌数を示した。ただしこちらは、5の『久安百首』以外は組題百首である。

【表一】により、「春」と「秋」の歌数は、3「大輔百首」を除き、すべての百首歌で二十首であることがわかる。恋部に重点を置いた「大輔百首」の例を除き、<sup>(注3)</sup>定家の部立百首の「春」と「秋」は、二十首が標準の歌数といつてよいだろう。

続いて【表二】をみると、2「永久百首」を除き、「春」と「秋」はすべて二十首となっている。これは、1「堀河百首」（組

題)を基本としたものと考えられる。組題や部立という形式に關わりなく、百首歌の「春」と「秋」は二十首が標準歌数とされたのである。【表一】の結果も、『堀河百首』の歌数を継承したものであろう。これにより、部立百首の「春」や「秋」を詠むにあたっては、二十首という枠で、ある程度パターン化された基本の構成を想定することが可能である。つまり、定家を含む当時の歌人たちが、百首歌の「春」や「秋」を詠む場合、詠進の度に一から構成を考え立ち上げるのではなく、すべての百首歌に共通して用いることのできる、基本の構成を持っていた可能性が考えられる。

【表一】定家の部立百首四季部の歌数(成立順)

百首歌	春	夏	秋	冬	計
1 初学百首	20首	10首	20首	10首	60首
2 二見浦百首	20首	10首	20首	10首	60首
3 大輔百首	15首	10首	15首	10首	50首
4 閑居百首	20首	15首	20首	15首	70首
5 一字百首	20首	15首	20首	15首	70首
6 正治初度百首	20首	15首	20首	15首	70首
7 千五百番歌合	20首	15首	20首	15首	70首
8 建保院百首	20首	15首	20首	15首	70首

【表二】定家以前の百首歌四季部の歌数  
(注)『久安百首』以外は組題百首

百首歌	春	夏	秋	冬	計
1 堀河百首	20首	15首	20首	15首	70首
2 永久百首	18首	12首	18首	12首	60首
3 為忠家初度百首	20首	15首	20首	15首	70首
4 為忠家後度百首	20首	15首	20首	15首	70首
5 久安百首	20首	10首	20首	10首	60首

このことをふまえ、定家の部立百首「春」と「秋」の構成を年次を追ってみてゆきたい。「大輔百首」は「春」と「秋」の歌数が十五首であるが、構成における五首の差を確認するため合わせみてゆくこととする。

定家は、「初学百首」において、「春」は桜、「秋」は月の歌を、十首前後の大きな歌群として詠んでいる。さらに、「春」は桜の白色に着目した構成を行い、「秋」も月の白色に着目した構成であった。<sup>(注4)</sup>先述したように、「初学百首」は、俊成の『久安百首』

を手本としており、これらの構成は俊成の『久安百首』にみられるものだが、他の『久安百首』出詠歌人と比べ、独自性の強い構成であった。<sup>(注5)</sup> 定家は俊成からそれを継承し、「初学百首」で用いていたのである。では、定家は「初学百首」以後の部立百首において、どのような構成を行っているのか、「初学百首」において特徴的であった「春」の桜歌群と「秋」の月歌群の数値により考えたい。【表三】は定家の桜と月の歌群数である。

【表三】 定家の部立百首「春」二十首中の桜歌群と「秋」二十首中の月歌群の歌数

定家の部立百首	桜歌群 (総数)	月歌群 (総数)
1 初学百首	11首	9首
2 二見浦百首	9首	9首
3 大輔百首※	7首	5首
4 閑居百首	6首	4首
5 一字百首	4首 (5首)	5首 (6首)
6 正治初度百首	8首	6首 (8首)
7 千五百番歌合	10首	9首
8 建保院百首	9首	6首

※(注) ただし、「大輔百首」は十五首中の数値

定家の桜歌群の数値をみると、1「初学百首」の一首が最も多く、4「閑居百首」や5「一字百首」を除くと、概して十首に近い数値である。「一字百首」は、定家が触穢のため籠居してい

た時に、三時で詠じた速詠であるが、歌頭に「あさかすみ」「ほととぎす」などを据えて詠んだ勅字百首<sup>(注6)</sup>である。私的な独詠である上に、遊戯的色彩が濃い。桜の歌をひとつの歌群としておらず、常とは異なる構成のようである。3「大輔百首」は「春」十五首なので、ほぼ半数が桜の歌群となる。一方、月歌群の数値は、桜に比べ全体的に「初学百首」より少なくなっているが、7「千五百番歌合」では「初学百首」と同数の九首である。同一百首歌でみると、桜歌群より二首前後少ないものが多く、「春」(桜歌群)と「秋」(月歌群)のバランスは「初学百首」と同じである。ただし、4「閑居百首」は桜と月のいずれの歌数も少なく注意される。「閑居百首」は、『拾遺愚草』に「文治三年冬与越中侍従詠之」と記されているように、家隆とともに詠じた百首歌で、互いの卑位卑官を嘆いた私詠である。白居易の「閑適詩」など漢詩の影響が指摘されるように、まさに「閑居」で我が身の不遇を嘆く歌が多い。そのため他の部立百首とは異質で、桜や月の歌群数に影響したと推測される。<sup>(注7)</sup>

次に例数は少ないが、比較のため、俊成の部立百首を次頁【表四】に示した。俊成は『久安百首』では、桜と月をそれぞれ十首の歌群としていたが、2「正治初度百首」3「千五百番歌合」のいずれの歌数も『久安百首』より減じ、「千五百番歌合」では半数である。月歌群では、必ずしもまとまった歌群としていないことにも変化がみえる。定家は、「初学百首」以降、部立百首の「春」と「秋」に、桜と月の大きな歌群を置いており、「一字百

「首」と「正治初度百首」の月以外は、必ずひとまとまりに置いて  
いる。「二見浦百首」以後の部立百首でも、「初学百首」「春」の  
桜歌群と「秋」の月歌群の歌数を、一部の例外を除き大きく変え  
ることがなかったのである。

【表四】 俊成の部立百首「春」二十首中の桜歌群と「秋」二十首  
中の月歌群の歌数

俊成の部立百首	桜歌群	月歌群 (総数)
1 久安百首	10首	10首
2 正治初度百首	6首	6首 (7首)
3 千五百番歌合	5首	3首 (6首)

## 二 定家の部立百首「春」の構成

次に、前節で確認した結果を基に検討する。「初学百首」の歌  
数がそれ以後もほぼ踏襲されたと考えられる。「春」の桜歌群の  
位置と桜の白色に着目した構成を取り上げ、検討したい。【表五】  
は、定家の部立百首「春」二十首中の桜歌群の位置である。「初  
学百首」では、「春」の九首目から一九首目までが桜の歌群で、  
暮春(三月尽)の歌を除き、「春」の後半部すべてが桜の歌で占

【表五】 定家の部立百首「春」二十首中の桜歌群の位置  
※(注) ただし、「大輔百首」は十五首中の位置

定家の部立百首	桜歌群の位置
1 初学百首	9～19首目
2 二見浦百首	10～18首目
3 大輔百首※	8～14首目
4 閑居百首	13～18首目
5 一字百首	10～13首目
6 正治初度百首	11～18首目
7 千五百番歌合	10～19首目
8 建保院百首	10～18首目

【表六】 俊成の部立百首「春」二十首中の桜歌群の位置

俊成の部立百首	桜歌群の位置
1 久安百首	9～18首
2 正治初度百首	11～16首
3 千五百番歌合	7～11首

められている。②「二見浦百首」以後も、特殊な例と考えられる  
「二字百首」を除き、百首歌における桜歌群の位置は、ほとんど

同じといつてよいだろう。4「閑居百首」では、歌数は六首とやや少なかったが、「春」二十首の中で占める位置をみると、数が少なくなった分、歌群の位置が後ろへずれ、「春」一三首目から一八首目までとなっている。桜の歌数は減っても、歌群の終わる位置に変化はないのである。「建保院百首」は、建保四年に詠まれたもので、「初学百首」から三十五年を経ているが、この百首でも桜は九首詠まれ、その位置は「春」十首目から一八首目までとなっている。「春」が二十首ではなく十五首である、「大輔百首」はどうであろう。ここでも、桜歌群は、八首目から一四首目となっており、歌群の終わる位置は「春」の終わりから二首目である。つまり、「春」二十首の百首歌と全く同じ構成なのである。(注)俊成も同じく【表六】に示したが、「春」二十首全体の中で占める桜歌群の位置は、定家ほど一定していない。定家が桜歌群の歌数だけでなく、その位置についても「初学百首」を踏襲していたことが確認できた。

次に定家の、桜の白色に着目した構成についてみてゆきたい。

「初学百首」では、

春雨のしくしくふればいな庭庭にみだるる青柳の糸

(拾遺愚草・八)

吉野山たか木の桜さき初めて色たちまざる峰の白雲

(同・九)

のように、「青柳」と桜の白色のコントラストが詠まれていた。しかし、桜歌群の前に、色を持つ景物を置く構成は、「建保院百

首」の、

新玉の苔の緑に春かけて山のしづくも時はしりけり

(同・一三〇七)

浅緑霞たなびく山がつの衣春雨色にいであつ

(同・一三〇八)

あをによしならの都の玉柳色にもしるく春はきにけり

(同・一三〇九)

峰の雪とくらむ雨のつれづれと山辺もよほす花の下紐

(同・一三一一〇)

きのふけふ山のかひより白雲の立田の桜今かさくらん

(同・一三一一一)

まで用いられていない。ここでは、一三〇七番歌の「苔の緑」から、浅緑の「霞」や「柳」の歌が続き、桜の歌一首目となる一三〇一番歌に「峰の雪」が詠まれ、その「峰の雪」が春雨によって解け、花が開き、「山のかひより白雲」が「立」つとする。この後には、

桜花さきぬる比は山ながら石間行くてふ水の白浪

(同・一三一一三)

と、石間を行く「白浪」に花を見立てる歌が詠まれ、

山の端をわきてながむる春の夜に花のゆかりの有明の月

(同・一三一一七)

白色の桜と有明の月が、混然一体となる美しさを詠んでいる。桜の白色に着目した「初学百首」と同じ構成意図が窺え、さらに、

桜と月の白色の美を一首のうちに重ねている。

では、「初学百首」から「建保院百首」まで、桜の白色に着目した構成はみられないのであろうか。「大輔百首」には、次のような配列がみえる。

色まさる松の緑のひとしほに春の日数の深さをぞしる

(同・二〇五)

浅緑露ぬきみだる春雨に下さへひかる玉柳かな

(同・二〇六)

秋霧を分けし雁金たちかへり霞にきゆる曙の空

(同・二〇七)

しるからむこれぞそれとはいはずとも花の都の春の景色は

(同・二〇八)

白雲とまがふ桜にさそはれて心ぞかかる山の端ごとに

(同・二〇九)

「初学百首」のような、青柳と桜の白色との、明瞭なコントラストではないものの、「松の緑」や柳の「浅緑」から、緩やかに「白雲とまがふ桜」に繋がり、桜歌群が始まる。「正治初度百首」では、桜の歌群の中に、

白雲の春はかさねて立田山をぐらの峰に花匂ふらし

(同・九一三)

高砂の松と都にことづてよ尾上の桜いまさかりなり

(同・九一四)

「白雲」から「松」へ、また二首中に「松」の緑と「桜」の白の

対比がなされていると思われる箇所がある。ここで注意されるのは、桜の白色に取り合わされるのは、必ず「緑」であることである。前掲「大輔百首」における桜歌群の最終歌は、

ふりにける庭の苔路に春暮れて行へもしらぬ花の白雪

(同・二一四)

である。「苔」に散り落ちる桜が「白雪」に見立てられ、「松」や「柳」と同様「苔」の「緑」と桜の白色との対比が詠まれている。定家が、部立百首「春」において、桜の白色と取り合わせるモチーフは、「初学百首」以来常に「緑」ということである。

「春」二十首における桜歌群の位置を先述したが、歌群の歌数に多少の変化があってもその位置は一定で、必ず春の末尾近くまで置かれていた。このことから、「春」は桜歌群の後に、一、二首しかないことがわかる。「初学百首」「春」末尾は、

おしなべて峰の桜や散りぬらん白妙になる四方の山風

(拾遺愚草・一九)

うらみてもかひこそなけれ行く春の帰るかたをばそこと知らねば

(同・二一〇)

とあり、先行勅撰集において、桜歌群の後に必ず置かれている款冬や藤など、色を持つ晩春の花は詠まれていない。これも、俊成の「久安百首」を手本としたものだが、定家は「二見浦百首」以降もこの態度を続けている。ただ例外として、後鳥羽院主催の百首歌にのみ、桜の後に「藤」の歌が詠まれている。定家は、後鳥羽院が主催する百首歌の「春」に限り、必ず藤を詠むのである。

例えば「正治初度百首」では、

春も惜し花をしるべに宿からんゆかりの色の藤の下かげ

(同・九一九)

とあるが、これは、定家が藤原氏であることから詠まれたと考えられる。「藤の下かげ」には、藤原氏でありながら不遇をかこつ身が表されていよう。藤は、百首歌の主催者である後鳥羽院に、自身が藤原氏であることを顕示するためのものと推測されるのである。したがって、単なる晩春の景物ではなく、廷臣としての定家自身の象徴と考えられる。

定家は、晩春の代表的景物である款冬を、部立百首では一首も詠んでいない。しかし、同じく部立形式の定数歌である、建暦二年の「院二十首」「春」十首には、

色にいでてうつろふ春をとまれともえやはいぶきの款冬の花

(同・一九七三)

がみえる。数は少ないものの百首歌以外では、部立形式の定数歌に款冬を詠んでいるのである。よって、定家が款冬を晩春に詠んでいないのは、部立百首における独自の態度であることが知られる。<sup>(注1)</sup>歌材として款冬と藤の差異は認め難く、やはり、後鳥羽院主催の部立百首で詠まれる藤は、藤原氏の象徴という意味を持つと考えるのが妥当であろう。さらに興味深いことに、定家は、順徳院主催の「内裏名所百首」<sup>(注2)</sup>「春」に藤を詠んでおらず、翌年成立の後鳥羽院主催の「建保院百首」では、藤を詠んでいる。これは、定家にとって仕えるべき主君は、後鳥羽院だけであったことを物

語るのではないだろうか。少なくとも定家が、後鳥羽院にそのような姿勢を示したかったものと推測される。<sup>(注3)</sup>

定家の部立百首「春」二十首の構成は、大きな桜歌群を後半部分に置いていた。これは、桜歌群の後に、款冬や藤といった晩春の花々を詠まないことと連動する。後鳥羽院主催の百首歌における藤も、藤原氏の象徴という役割により一首置かれたに過ぎない。俊成は、「正治初度百首」「千五百番歌合」のいずれの「春」でも、桜の後に「久安百首」では詠まなかった款冬や藤を詠んでいる。<sup>(注4)</sup>この点でも「久安百首」で用いた構成を、自身の基本とはしていないことが知られる。これに対して、俊成の『久安百首』「春」を手本とした、定家の「初学百首」「春」の特徴的な構成は、一部の例外を除き、その後の定家の部立百首における基本の形となったのである。

### 三 定家の部立百首から「定家卿百番自歌合」へ

定家は、俊成の『久安百首』を手本とした「初学百首」「春」の特徴的な構成を基本とし、その後の部立百首に用いたことがわかった。俊成が、「正治初度百首」や「千五百番歌合」において、『久安百首』の構成を踏襲せず、詠出のつど新たな構成で詠んだ態度とは明らかな違いがみえる。

ところで、定家のこのような態度は、肯定的にも否定的にも受け取ることが可能であろう。否定的に捉えるならば、定家は百首歌に進に際し、新たな構成を一から立ち上げることなく、機械的

ともいえる態度で常に類似の構成により詠んでいることになる。しかし稿者は、定家の態度を肯定的に受け止めたい。なぜなら、定家の和歌の総決算ともいえる、『定家卿百番自歌合』「春」の構成が、本稿で考察した部立百首における構成の延長上にあるからである。

『定家卿百番自歌合』は、単なる秀歌の羅列ではなく、綿密な結番や、構成配列がなされている作品で、部立を持ち、何より百番という数が百首歌に通じるものである。また、四季部が五十番百首、恋部と雑部合わせて五十番百首であることも、百首を一括りとして意識したためと考えられる。『定家卿百番自歌合』三次本<sup>(注5)</sup>「春」の構成を確認すると、「春」は一四番二八首だが、桜歌群はそのうちの六番二一首を占め、歌群が置かれた位置も、「春」後半部の八番から一三番までである。したがって、桜歌群が「春」全体の約半数であり、「春」の後半部分を占める構成が、部立百首の基本の形と同様である。「春」最後の一番は、

十四番

左 網代木に桜こきませ行く春のいざよふ浪をえやはとどむる  
(定家卿百番自歌合・二七)

右 あはれいかに霞も花もなれなれて雲しく谷に帰る鶯  
(同・二八)

桜を詠み込んだ春春の歌で終えられ、藤や款冬の歌は撰歌されていない。定家の部立百首以外の定数歌には藤や款冬がみえ、部類歌収載の『拾遺愚草』下巻「春」における桜歌群の後には、

竜田河いはねの躑躅影みえて猶水くくる春のくれなる  
(同・水辺躑躅・二一九)

款冬のこたへぬ色に露おちて里の昔はとふかひもなし  
(同・故郷款冬・二一九三)

しひて猶袖ぬらせとや藤の花春はいくかの雨にさくらん  
(同・雨中藤花・二一九四)

と、「躑躅」「款冬」「藤」の歌が置かれている。『定家卿百番自歌合』に藤や款冬の歌が一首もみられない理由は、定家の藤や款冬の歌に、自身が秀歌と認め得る歌がみえないためだけとは言い難いのではないか。

また、『定家卿百番自歌合』には、桜を白色に見立てた歌は四首あるが、中でも九番は、

左 み吉野は花にうつろふ山なれば春さへみゆき故郷の空

右 桜色の庭の春風跡もなしとはばぞ人の雪とだにみん  
(定家卿百番自歌合・一七)

(同・一八)

と、左右とも桜を「雪」に見立てた歌で番わされ、次の十番左には、

桜花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる浅茅生の宿  
(同・一九)

「浅茅」を詠んだ歌が置かれている。「浅茅生の宿」は荒れ果てた住居を表す歌語だが、晩春の浅茅は青々と繁る草のイメージであろう。ここにも、控えめではあるが、桜の白色と緑の組み合わせ

がみえ、桜と対比され取り合わされる色は緑のみである。『定家卿百番自歌合』四季部の「春」は、定家が自身の裁量で、歌材を取捨選択し構成配列することのできる部立百首において、繰り返し用い続けた基本の形と同一線上にあるといえる。したがって、この基本の構成は、定家が最良のものとして積極的に用い続けたと肯定的に考えたいのである。

### おわりに

定家の「初学百首」は、俊成の『久安百首』を手本とし、そこから多くのものを撰取していた。しかし、父の百首を手本として詠じたとき、単純に捉えることは早計である。定家は父の百首を咀嚼し、独自の基準に適うものだけを選び取り、「初学百首」を自身の部立百首の基本の形としたのである。そして、生涯その態度は変わることがなかった。その意味で、「初学百首」には新たな意義が加わることとなる。ここには、俊成にとつて、『久安百首』が、基本となり得なかつたこととの大きな違いがみえる。しかしながら、俊成が家の命運を賭けて、崇徳院による応制の『久安百首』を詠進したことと、定家が俊成の庇護の下、歌の家御子左家の継承者として、歌人としてのスタートを切り、「初学百首」を詠じたこととの違いともいい得る。いずれにせよ、定家は「初学百首」詠進の段階で、目の前の百首を詠むのに精一杯であったのではなく、歌人として遙か先を見据えていた可能性が考えられる。やはり定家は、「初学百首」において、部立百首を詠むというこ

とにきわめて自覚的であったのだろう。

本稿では、「初学百首」を起点に、定家の部立百首「春」を取り上げ、桜歌群を中心に通時的に考察し、歌群の歌数やその位置さらに桜の白色と緑との対比が、「初学百首」以降の部立百首に詠まれ続けていたことを明らかにした。歌風の変化とは異なり、定家の部立百首の構成には、生涯を通じての基本形が存したのである。

定家は、部立百首「春」を詠むにあたり、新奇な歌材に拠らなただけでなく、伝統的の歌材の中でも古来より最も数多く詠まれてきた桜にこだわったといえる。桜歌群に着目すれば、定家は部立百首詠進のつど、十首前後から成る桜歌群内部の構成に新しさを試みたことが予想される。さらに、桜を白色の景物に見立てることや、緑の景物との対比といった、もう一段階深いレベルでの基本のスタイルに沿って桜の歌を新たに詠むこととなる。これはまさに、「近代秀歌」において、「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め」と記した、定家歌論の骨子を体現するものである。百首歌詠進に際し、定家が自身に課した新しさは、桜歌群内部の構成や歌にあったと考えられるが、これについては今後の課題としたい。

### 注

(1) 拙稿「定家「初学百首」にみる「部立百首を詠む」というこ

と」『待兼山論叢』文学篇第四一号（二〇〇七年二月）

(2) 「一字百首」は定家の独詠だが、その後慈円や公衡も定家に倣

い、同百首を詠じている。

- (3) 「大輔百首」は、四季五十首・恋五十首であって、百首歌に通常含まれる雑部が設けられておらず、恋部偏重の構成である。

- (4) (1) 拙稿参照。

- (5) 拙稿「俊成の『久安百首』「春」と「秋」の歌材と構成―頭輔との比較を中心に―」『国語国文』第七十六卷第十号(二〇〇七年一〇月)に詳述。

- (6) あらかじめ決められた語句二十、字数百字を、一字ずつ歌頭に詠んだ百首。田仲洋己「藤原定家の「二字百首」について」『岡山大学文学部紀要』第二六号(一九九六年二月)に詳しい。

- (7) 久保田淳『新古今歌人の研究』第三篇第二章「新古今への道」(東京大学出版会・一九七三年)、神谷敏成氏「閑居百首」について『和歌文学研究』四十二号(一九八〇年四月)などに指摘がある。

- (8) 同百首には、定家の他の部立百首にはみられない歌材、「春」では、よもぎ、わらびなどがみえる。いずれも「閑居」に相応しい歌材といえよう。

- (9) 「大輔百首」一例だが、部立の歌数に関わりなく、部立の約半数を桜歌群として部立後半部に置き、桜歌群の後は一、二首という形が基本という想定も可能であろう。

- (10) 俊成「久安百首」「春」二十首の末尾は以下のように、款冬や藤を詠んでいない。

桜咲くふもとの小田の苗代は種より先に花ぞ散りける

(久安百首・八一八)

ますらをは同じふもとを返しつつ春の山田に老いにけるかな

(同・八一九)

ゆく春の霞の袖を引き止めてしほるばかりやうらみかけまし

(同・八二〇)

- (11) 承久の乱後に催された、九条教実主催の二十題百首「閑白左大臣家百首」「暮春」五首にも、  
匂ふより春は暮行く款冬の花こそ花のなかにつらけれ  
(拾遺愚草・一四二二)

と、款冬が詠まれている。ただし、藤は詠まれていない。

- (12) 「内裏名所百首」は組題百首だが、百の名所を歌題としており、歌題による歌材の制約はない。

- (13) 定家と後鳥羽院の関係については、和歌をめぐる対立を中心に論じられているが、後鳥羽院主催の公的な催しである百首歌において、定家は臣下(藤原氏)であることを院に示し続けたと考えたい。

- (14) 俊成の「正治初度百首」「千五百番歌合」には、堀河題である呼子鳥や蘭なども詠まれている。歌材に關していえば、俊成の部立百首「春」には問題への回帰も見受けられるのである。

- (15) 「定家卿百番自歌合」は、建保四(一一二六)年の一次本成立から貞永元年以降改訂の三次本まで、定家自身により二度改訂されている。現存伝本は二次本と三次本のみだが、「春」に構成上の変化はみられない。

《使用テキスト》\*『拾遺愚草』：冷泉家時雨亭叢書第八卷『拾遺愚草上中』(朝日新聞社・一九九三年) 同第九卷『拾遺愚草下』(同・一九九五年) \*『拾遺愚草員外』：宮内庁書陵部蔵御所本『六家集』所収本 \*他の和歌及び番号は、『新編国歌大観』による。なお、引用に際し、適宜表記を改め濁点を私に付した。

(ほそかわ・ちさこ 本学大学院博士後期課程修了)